経営情報学会 2025 年度年次大会報告

黄　婷婷（こう　ていてい）　武庫川女子大学
高木俊雄（たかぎ　としお）　横浜市立大学
向日恒喜（むかひ　つねき）　中京大学

1.　大会概要

2025 年度の年次大会が，2025 年 6 月 7 日（土）の午後に Zoom とバーチャル空間の oVice を使って，「デジタル技術が創る次世代社会ビジョン」をテーマとして開催されました．今回の大会では，中島賢一氏（福岡 e スポーツ協会会長）をお招きしての招待講演，小倉博行氏（日本大学）による学会賞受賞者講演，ポスター発表セッションのプログラムが設けられました．昨年，一昨年に続き，今年度も一方向的な講演は Zoom，双方向的なポスター発表セッションは oVice で開催いたしました．大会には 175 名もの多くの皆様に申し込みをいただきました．

以下，今大会の様子を簡単に報告させていただきます．

2.　招待講演

この度の招待講演は，福岡 e スポーツ協会会長の中島賢一氏に「e スポーツがインストールされた社会がもたらす新しい価値」でお願いいたしました．中島氏は，ゲーム，映像などのクリエイティブ分野やスタートアップ企業のビジネス支援に関わった後に e スポーツの普及活動に従事されています．講演では e スポーツが企業や地域，障がい者，高齢者など幅広く社会にもたらす波及効果についてお話しいただきました．

中島氏が講演で述べられていたように，世界のゲーム人口は現在 37 億人となっており，また 2023 年は 29 兆円市場となっております．さらに 2026 年には 47 兆円市場になると予想されています（図 1 参照）．

このように非常に大きいゲームコンテンツ市場ですが，中島氏は主に九州でさまざまなイベント等を企画実施しています．例えば，2019 年には格闘ゲームの大会である EVO（Evolution Championship Series）Japan を福岡市等からの協力を受け開催しています．このイベントでは，3 日間の開催日はもちろんのこと，その前後も含めて約 11.7 億円の経済波及効果を生み出すことができたとのことでした（図 2 参照）．

また，九州とも縁のあるイベントとして，福岡県福津市にある宮地嶽神社とコラボして「Q1 スーパートーナメント」という e スポーツ大会を開催した経験もあるとのことでした（図 3 参照）．e スポーツというとオンライン上で完結するというイメージがありますが，中島氏はリアルとバーチャルとを融合してイベントを開催したりしています．

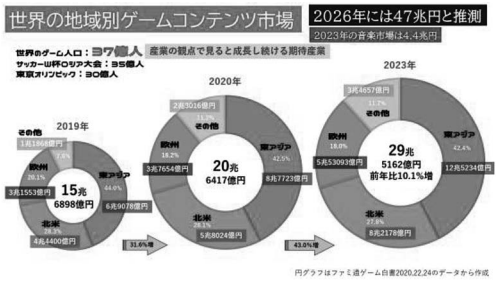

図 1　世界の地域別ゲームコンテンツ市場

図 2　EVO Japan2019 開催概要

図3　Q1スーパートーナメント概要

このように非常に興味深い講演でした．講演後は活発な質疑応答も行われました．

3.　学会賞受賞講演

2024年度の学会賞は，小倉博行氏（日本大学），馬奈木俊介氏（九州大学）による「電力自由化がグリーントランスフォーメーションに与える影響の評価―デジタル技術を利活用した電力の安定供給と脱炭素の両立―」（『経営情報学会誌』32巻2号，pp. 39–67）に決定しました．そこで本大会では，著者の小倉博行氏にこの論文内容について講演いただきました．

講演内容としては，論文に示されている通り，データやデジタル技術を利活用して，ダイナミック・プライシングやディマンド・リスポンスなどの電力自由化政策に基づく節電行動を促す経営を行うことにより，電力ひっ迫時の電力の安定供給と脱炭素の両立（グリーントランスフォーメーション：GX）が可能となることについてのものでした．

本研究で用いられたデータセットとしては，2016年4月以降の東京電力エリアの電力需給，気象及び卸電力市場のデータを利用し，卸電力市場が最大電力需要に与える影響評価モデルの構築及び分析を行ったものとのことです．

受賞，誠におめでとうございます．

4.　ポスター発表セッションと学生萌芽研究部会ブース

本年度の年次大会では，昨年度同様，ポスター発表セッションと学生萌芽研究部会ブースを設置し，参加者が自由に意見を交換できる環境を整えました．研究発表の申し込みは，Peatixでのチケット購入，Googleフォームでの情報登録，Dropboxでの予稿原稿提出の3段階で実施され，各発表者は入念な準備を経て臨みました．今回は40件の応募があり，テーマも多岐にわたりました．例えば，特許データ分析や観光行動モデル，企業の意思決定メカニズムの解析など，学際的なテーマが目立ちました．方法面では，事例研究からデータ分析，シミュレーションまで，幅広いアプローチが見られ，参加者の専門性の高さと関心の多様さを感じさせました．特に，オンライン・オフラインの双方の交流を意識した工夫が随所に見られ，参加者同士のディスカッションや質疑応答も活発に行われました．

ポスターセッション中は，参加者が自由にブースを回遊でき，研究者同士の交流が促進されました．会場では学生と教員，社会人研究者が混在し，現場の知識と理論の融合が生まれる瞬間が多く見られました．

今年度の「優秀萌芽研究賞」には，以下の4件が選出されました．

- 平松隆志氏（静岡大学）・遊橋裕泰氏（静岡大学）「スマートシティ構想における幸福度データ分析とエコシステム設計の試み」
- 河本　藍氏（慶應義塾大学）・河野一平氏（慶應義塾大学）・大平伊吹氏（SYNCTEM株式会社）・清水たくみ氏（慶應義塾大学）「継続的なVirtual Teamの信頼形成」
- 長濱由成氏（山口大学）・藤井伽璃氏（山口大学）・森　愛稀氏（山口大学）・杉井　学氏（山口大学）「小規模事業主の内面的な障壁を考慮した新たなDX推進手法の提案」
- 靏田侑司氏（東京理科大学）・柿原正郎氏（東京理科大学）「UGCが音楽ファンに与える影響とそのメカニズムの考察：同質性と弱紐帯の観点から」

いずれも現代社会の課題に深く迫り，今後の研究のさらなる発展が期待されます．

さらに，今年も学生萌芽研究部会のブースを設置し，部会活動の紹介と学生会員間のネットワーキングの場を提供しました．セッション開催中は立ち寄る人が少なかったものの，終了後の交流タイムには多くの学生が集まり，活発な意見交換が行われました．このように，今年度の年次大会は，研究の途中

段階を含めて自由に議論できる空気があり，次の研究発表大会に向けた新しいネットワークづくりの場としても重要な役割を果たしました．研究推進の視点から，今後もこうした交流の場がますます発展していくことが期待されます．

5. おわりに

2020年度以降，年次大会はオンラインでの開催となり，毎年，試行錯誤を重ねつつ大会を運営していましたが，Zoomによる講演会．oViceによるポスターセッションのスタイルが定着しつつあり，ポスターセッションも例年40件前後のお申し込みをいただいています．ただ，一部の会員の皆様からは年次大会に対してのご要望もいただいております．今後もこのスタイルに囚われることなく．大会の運営方法について検討していきたいと感じさせられています．機会がございましたら，年次大会の感想などを大会担当理事に寄せていただければ，今後の参考とさせていただきます．

今回の大会を無事終えることができたのも，講演者，発表者，参加者，そして準備に関わってくださった多くの方々のご協力があってのことです．この場をお借りして，大会に関わってくださった皆様に，御礼申し上げます．